



女騎士の城

# 事故で04歳JOにTSFしたので 露出や変態行為を堪能するCG集



DOJIN  
R18  
成人向け

僕が目覚ますと、そこは病院の二室だった。

【僕】「…ん？　ここは…？」

【医師】「お？　気がついたかね。　ここは病院だよ。　君は1年も眠り続けていた状態だったのだ」

何があったのかをゆっくりと思い出していく。

とりあえず僕は特筆すべき事もない平凡なオッサンだ。

趣味と言えば美少女フィギュアやエロ同人誌をを買ってオナニーするくらいで、当然彼女もいない。

あの日もいつも通り、秋葉原の店で美少女フィギュアとフィギュア用の衣装を買った後…

【僕】「…そうだ、僕は信号無視のトラックにはねられて…」

【医師】「そう、君の体は手が付けられないほど損傷していたんだ。

だから新しい治療法を試さざるを得なかった」

【僕】「新しい治療法ですか？」

【医師】「そうだとお。　治療は大成功だ。　さあ、起き上がって自分の体を見てみたまえ」

医師に促されるまま、体中についた管を取り外しながら、僕はベッドから起き上がる。

ずっと寝ていたからか、手足はものすごく細くなっている。

手足だけではない、胴体も背中とお腹がくっつくかと思うほど細い。

いや…体が細いとか、そういうレベルの話ではない。

この体には女性の乳房があり、そして股間には慣れ親しんだペニスが無い。

僕は自分の身に起きた状況に混乱しながら、病室にある姿見の前に立ち、

そして悲鳴を上げた。



鑑に映し出されたのは、どこからどう見てもオッサンではなく、女の子だった。

【僕】「な、なんだこれっ！女！？ 僕が女の子になってる！？」

【医師】「君の体で無事だったのが脳だけだったから、万能細胞を培養し、君の体を1から作り直したら、何故か女の子の体になったんだよ。でも君が助かる方法はそれしかなかったんだ」



僕はうるたえながらも、医師の説明を聞いた。

とりあえずこの体は○四歳程度の女子の体であり、元に戻る方法はないという事。

この体になった以上、元の男として生きて行く事は不可能なので、

○四歳の女子としての戸籍が用意されており、退院したら○学校に入る事になっているという事。

トラックの運転手の入っていた保険から、死亡扱いで保険金が出ているため、当面食うには困らない事などだ。

【医師】「という事だ。第二の人生、頑張ってくれたまえ」



【僕】「それでは本当にお世話になりました。ありがとうございました」

そしてついに僕は退院の日を迎えた。

僕の服は看護師さんが色々用意してくれたが、女物の服の良し悪しは良く分からなかったのとおりあえず〇学校で着る予定の制服を着て帰ることにした。スカートがスースーしてなんだか変な気分になってくる。

【医師】「不慣れな体で暮らすとなると、何かとトラブルもあるだろう。困ったらいつでも相談に来たまえ」

【僕】「わかりました、ありがとうございました」

僕はお世話になった医師と看護師に丁寧に敬礼を言って、病院を出た。

僕の新しい住居は、この近くの賃貸マンションだそうだ。

僕は足早に新しい住居へと向かった。





「僕」 「ママが新しい僕の部屋か。いい所じゃないか」

新築マンションの二室が僕の新しい部屋だった。部屋には家財道具一式がすでに入っており、クローゼットには着替えや学校で使う服、机には教科書や文房具なども揃っていた。しかし、今の僕は新しい生活に備える事よりも、まずやりたい事があった。

「僕」 「流石に病院では出来なかったからな！」

僕は部屋に入っただけで、姿見の前に立ち、パンツを脱ぎ捨て、スカートをめくり上げた。姿見には、◎四歳女子◎学生の、毛も生えていない割れ目がぼつちり写っている。

赤の他人の体でとんでもないわいせつ行為をしているような気さえするが、鏡に映る美少女は、自分の万能細胞から出来た、真正銘自分自身なのだ。僕は興奮を抑えきれなくなり、セーラー服を脱ぎ捨ててその場に座り込んだ。







【僕】「うおっ……すげえ……女の体っていいなってのが……」

僕は姿見に映し出された自分の体をじっくりと嘗め回すように眺めた。膨らんだ両胸とピンク色の乳首、折れそうなほど細くくびれた腰、まだ毛も生えていない割れ目、そんな様子を興味深そうに眺める可愛い顔。これが僕の今の姿だなんて、本当に信じられない。この少女に悪い事をしているような罪悪感すらある。

【僕】「よ、よしっ……自分の体なんだから、オナニーしても大丈夫だよな……」

僕は鏡に映し出される自分の姿をオカズにしてオナニーする事にした。





【僕】「それにしても、初めて触る女の体が、まさか自分自身とは…」

彼女もいない童貞の僕にとっただ、

女体は未知の世界だ。

とりあえずおっぱいをゆっくりと触る。

柔らかくて気持ちいい。

乳首をそーっと指先で転がしてみる。

くすぐったいような気持ちよさで、

みるみる乳首が硬くなっている。

そして最後に割れ目にそーっと指を伸ばす。

【僕】「ひいんっー?」

クリトリスが指にひっかかった瞬間、あまりの感度でびっくりにして声が出てしまった。





【僕】「い、今の自分の声が……？ あんなに可愛らしい声……してるのか……」

引っ越したばかりで、昼間から大きな喘ぎ声をあげていたら、隣近所から怪しまれるかもしれない。僕は恐る恐る割れ目に指を伸ばし、強すぎる刺激を与えないように、ゆっくりゆっくり愛撫を続けた。

【僕】「んっ……ふあっ……」

どんなに声を抑えようとしても自然に溢れてしまう。それほどまでに、女の体は、僕の体は感度がいい。そして、僕は愛液を垂れ流しながら、はじめての女の絶頂を味わった。





【僕】「はあっ……はあっ……」

絶頂でビクンビクンと震えていた体が収まるのを待ってから、僕は机からボールペンを取り出した。僕の体が小さくなったからか、思いのほか大きく感じるボールペンを、指先でくるくる回しながら鏡に向かう。

【僕】「やっぱり、中に何か入れて見たくなるよな」

さっきの感度を考えると、いきなり太い物を入れるのは抵抗がある。とりあえずは細いボールペンで慣らしていこうと考え、ボールペンの芯を抜いた後、ゆっくりと濡れてほぐれた割れ目へと先端を近づけた。







【僕】「い、入れるぞっ……んっ……」

処女膜を破らないよう、膜に開いていた  
小さな穴から、そっとペンを差し込む。  
僕の膣は異物に反応するかのよう  
にキュツとペンを締め付ける。  
感度はクリトリスほど高くないが、  
膣肉とペんがこすれあう感触は程よく、  
いつまでも擦り上げたくなっている。

【僕】「ホントにボールペン挿入してるよっの子……」

鑑に映っているのは、○四歳の女子○学生で、そんな子が膣にボールペンを挿入している。  
そんな様子に興奮を覚えながら、僕はさらにボールペンを深く突き刺していった。





【僕】「どこまで入るかなっ!」

僕はおそろおそろペンを差し込んでいく。僕の膣はどんどんペンを飲み込んでいき、そして奥のコリコリした部分に当たった。その瞬間、痺れるような痛みと快感が僕の下腹部から脳天へと突き抜けた。

【僕】「ひゃんっ!?!」

あまりの刺激の強さに、僕は悲鳴のような声を上げてしまった。

刺激の位置と感触から、子宮口をつついたのだと理解した僕は、さらに興奮した。

僕はボールペンをゆっくりと動かして、子宮口をコリコリと愛撫した。

声を抑えるのも忘れ、僕は子宮口愛撫による連続絶頂に酔いしれた。





【僕】「はあっ…はあっ…」

何度絶頂を迎えただろうか。  
十回目くらいまでは数えていたが、  
それ以降は数える事も忘れ、  
盛りのついた野獣のように、ひたすら  
子宮口とクリトリスを刺激し続けていた。  
新品の絨毯には愛液のシミが出来ている。  
気がつけば周囲はもう真っ暗だ。

【僕】「流石にやりすぎたかな…でも気持ちよかった…」

とりあえず今日はここまでにしておこう。どうせ死ぬまでこの体なのだから。  
僕はこのからの生活を想像し、期待に胸を膨らませながらベッドにもぐりこんだ。





翌朝。

僕はシャワーを浴びて汗を流した後、◎学校へ行く準備をした。

僕は戸籍上は担当医師の親戚という事になっており、交通事故で記憶喪失という設定になっている。

そういう事情のため、しばらくの間は授業も受けるのもサボるのも自由という事らしい。

正直、◎学校二年生の授業を受けなおすのは面倒なので丁度よかった。

「僕」「さて、制服に着替えただけ……」

僕は改めてセーラー服に袖を通した。どこからどう見ても女子◎学生だ。元男だなんてとても思えない。それどころか、今までの人生で見た中で一番可愛いと言って過言ではないレベルの美少女だ。

しかし、女の体になってからは、病院にいるか家にいるか程度で、大勢の人前に出た事は一度も無い。これから学校に移動する間も、学校についてからも、大勢の人達の目にさらされる事になる。

どういふ風に見られるのだろうか……。僕は一抹の不安を抱えながら、マンションから足を踏み出した。





